

# 沖縄島名護市屋部川周辺の 鳥類調査

～探鳥地としての可能性を探る～



2011年9月

名護市立屋部中学校

1年A組 北村 育海

# 目次

1. はじめに	1
2. 調査場所	1
3. 調査方法	2
4. 調査結果	4
5. 考察	9
6. 今後の課題	11
7. 感想	11
8. 謝辞	11
9. 参考文献	11

## 資料編

- ・ 調査風景等の写真
- ・ 鳥類調査票

# 沖縄島名護市屋部川周辺の鳥類調査

～探鳥地としての可能性を探る～

名護市立屋部中学校

1年A組 北村 育海

[指導者] 北村 崇明

## 要 旨

2011年3月～9月まで、屋部川周辺において鳥類相と個体数の推移を調査・解析を行い、屋部川の探鳥地としての可能性を探った。

調査ルートを2本設定し、ルートセンサス法により調査を実施した。ルート1：アパート～屋部川（宇茂佐郵便局）。ルート2：屋部川の志味橋～大瀬橋～名座喜橋。

ルート1では12科17種、ルート2では21科44種の鳥類が確認できたことから、ルート2の方がより多くの鳥類の生活の場となっていることが分かる。

ルート1では、優占種は大部分が留鳥であり、優占種の第1位～3位までは、ハシブトガラス、スズメ、シロガシラが占めていることが多かった。ルート2では、3月～9月まで優占種の第1位がすべてハシブトガラスであったが、3月～5月までは、キマユムシクイ、ムナグロ、イソシギなどの渡り鳥が優占種に含まれていた。

ルート1では、大部分が留鳥であったが、ルート2では留鳥が常に多く確認されているものの、3月～5月、7月～9月では冬鳥と旅鳥といった渡り鳥が多く確認され、5月～8月には夏鳥がわずかであるが確認されている。

ルート1では、大部分が陸禽であり、水禽および渉禽はほとんど確認されなかった。これに対し、ルート2では、陸禽が常に多く確認されてはいるが、季節に応じて渉禽や水禽が確認されている。

これらの調査結果を元に、屋部川における鳥類観察マップを作成した。この鳥類観察マップを利用することで、屋部川の鳥類が観察しやすくなり、近隣の屋部中学校や屋部小学校での理科や総合学習、あるいは一般の方々に屋部川を鳥類観察の場として利用可能であると考えられる。

これらのことから、屋部川は探鳥地として利用可能であり、学校現場や地域住民の環境学習の場として利用価値があると考えられる。

# 沖縄島名護市屋部川周辺の鳥類調査

～探鳥地としての可能性を探る～

名護市立屋部中学校

1年A組 北村 育海

[指導者] 北村 崇明

## 1. はじめに

沖縄本島には多くの渡り鳥が、渡りの中継地点として訪れている。私が住んでいる家の近くには屋部川があり、河川周辺には色々な鳥類を見かける。屋部川は名護の市街地を流れ、過去には周辺の土地開発に伴う大量の赤土汚染のあった河川の一つである（西平、1974.）。沖縄には多くの探鳥地があるが、屋部川はそれには含まれていない（沖縄県立博物館、1999.）。そこで、本研究では屋部川周辺を訪れる鳥類相を明らかにして探鳥地としての可能性を探ってみたい。

## 2. 調査場所

屋部川における調査地点を図1に示した。

屋部川は河口からしばらく遡上すると、東屋部川と西屋部川に分岐する。今回は、東屋部川周辺を調査地点とした。

屋部川（東屋部川）は長さ5.6kmで、流域面積は12.6km<sup>2</sup>になり、名護市街地裏の低地部を流れている。河川勾配はゆるやかで、源流付近でも標高は25m程度である。今回は、東屋部川の中で、比較的交通量が少なく、開放的であり、人の移動が少ない志味橋～名座喜橋を調査範囲とした。この範囲は、潮汐の影響を受け、干潮時には



図1 屋部川周辺における鳥類調査ルート

河床が露出して干潟となる部分が見られる。それと合わせて、アパートから屋部川（宇茂佐郵便局）へ到達するまでの道のりも調査範囲とした。

調査ルートを2本設定した。

ルート1：アパート～屋部川（宇茂佐郵便局）→ 陸域の鳥類を確認するために設定した。アパート周辺は、閑静な住宅街である。近年、加入者が増加しており、新築のアパートが続々と建設中である。ルート1周辺には、水辺はほとんど見られない。ルート1の長さは約500mである。

ルート2：屋部川の志味橋～大瀬橋～名座喜橋 → 屋部川周辺の鳥類を確認するために設定した。志味橋から名座喜橋までは、左岸側（下流に向かって左側を左岸という）に遊歩道があり、鳥類の観察に適している。名座喜橋より上流の白銀橋では大きな中州が見られるが、交通量が多く危険であり、騒音も激しいため、調査範囲外とした。ルート2の長さは約1600mである。

以下に、屋部川の調査範囲である3本の橋周辺の概要について記載した。

#### （1）志味橋

調査範囲内の下流地点である。河口から約2.2kmに位置する。橋の下流側には中州が大きく盛り上がり小山のようになっており、サギ類がよく止まっている。河床は大部分が泥質であり、カニ穴が多数存在する。干潮時にはシオマネキ類が多数観察できる。

#### （2）大瀬橋

調査範囲の中間に位置する。河口から約2.6kmに位置する。河床は大部分が砂泥質であり、カニ穴が多数存在する。干潮時にはシオマネキ類が多数観察できる。

#### （3）名座喜橋

調査範囲の上流地点である。河口から約3.0kmに位置する。河床は大部分が砂質であり、カニ穴がほとんど見られない。干潮時にはシオマネキ類がほとんど観察できない。

### 3. 調査方法

#### （1）調査期間

2011年3月～9月まで調査を実施した。調査日を表1に示した。

表1 屋部川における鳥類調査実施日

月	調 査 日（調査時刻の潮汐の状況）	調査回数
3月	13(干潮付近), 20(満潮), 21(満潮), 25(満潮付近), 26(干潮付近), 27(中間), 28(干潮), 29(中間), 30(中間), 31(干潮付近)	10
4月	2(満潮付近), 5(満潮), 6(干潮付近), 7(満潮), 8(中間), 10(満潮付近), 16(中間), 24(満潮), 29(中間)	9
5月	3(干潮), 7(満潮), 14(干潮付近), 15(干潮付近), 16(満潮付近), 21(満潮付近), 22(満潮), 28(干潮)	8
6月	5(満潮), 11(干潮), 12(干潮), 18(満潮), 20(干潮), 23(干潮)	6
7月	2(満潮付近), 3(満潮付近), 9(干潮), 10(干潮), 16(満潮付近), 17(満潮), 22(中間), 24(干潮), 25(干潮付近), 26(中間)	10
8月	7(干潮), 8(干潮), 9(干潮), 11(満潮付近), 22(干潮付近), 23(干潮), 24(干潮付近), 25(満潮付近), 26(中間), 27(干潮)	10
9月	3(満潮), 4(干潮), 5(干潮付近), 6(干潮), 9(満潮), 10(満潮付近), 11(満潮付近), 18(満潮付近), 22(干潮), 24(満潮), 26(満潮付近)	11

※調査範囲は潮汐の影響を受けるため、調査時刻が【満潮】、【干潮】、満潮と干潮の【中間】のどれに当たるかを示した。なお、調査時刻が満潮あるいは干潮時刻の1時間以内である場合は【満潮付近】あるいは【干潮付近】とした。

(2) 鳥類調査

ルートセンサス法により鳥類調査を実施した。すなわち、ルート1とルート2を秒速約2mで歩きながら、目視（肉眼または双眼鏡、フィールドスコープ）や鳴声で確認できた鳥類を図鑑で調べて記録用紙に記録した。記録内容は、確認時刻、種名、個体数、行動とした。調査は毎月10回程度、なるべく早朝に実施した。調査票に記録した内容をエクセルデータとしてパソコンに入力・保存し、集計・解析を行った。集計内容は、種ごとの個体数変動、渡り鳥・留鳥別の個体数変動、水禽・渉禽・陸禽ごとの個体数変動などとした。可能な限り確認できた鳥類の写真を撮影し、資料編として添付した。




鳥類の生息区分（留鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥・迷鳥）についての説明を、表2に示した。水禽・渉禽・陸禽についての説明を、表3に示した。

表2 鳥類の生息区分

生息区分	説明
留鳥(RB)	一年中同一地方に生活し、季節移動をしない鳥類。
夏鳥(MB, SV)	春から初夏の頃、日本より南の越冬地から一つの地方へ移動して営巣・繁殖し、秋季に再び温暖な南の越冬地に行く渡り鳥をいう。
冬鳥(WV)	日本より北の地方から夏季の終わりや秋季に渡来して越冬し、春季に去って、夏季には北方の地域で営巣・繁殖する渡り鳥をいう。
旅鳥(PV)	ある渡り鳥が春と秋の渡りの途中に一つの地方を通過する場合、その地方において、その鳥を旅鳥という。
迷鳥(IV, AV)	平常は生息も渡来もしないが、台風等その他偶然の機会により、一地方にたまたま現れる鳥類をいう。

出典：『沖縄野鳥研究会編、2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版』

表3 さまざまな「鳥類」とその生息環境（特に河川中～下流域において）

	水禽	渉禽	陸禽
種類	 カモ カイツブリ など	 サギ シギ チドリ など	 猛禽類 小鳥類 など
生息環境	水面,水草帯	水面,浅瀬,砂利	ヨシ原,河畔林
食物	魚,貝,水草, プランクトンなど	魚,貝,虫,水草など	魚,鳥,虫,植物 の種など

出典：『村上 悟、2001. 水鳥を通じて見る琵琶湖流域. 淀川水系流域委員会琵琶湖部会.』を一部改訂。

#### 4. 調査結果

##### (1) 鳥類の出現種数および月別集計

ルートごとの鳥類の確認種リストを表4と表5に示した。

ルート1では、12科17種の鳥類が確認できた。確認できた種のうち、留鳥が11種であり、渡り鳥は6種であった。また、確認できた種のうち、陸禽が16種、渉禽が1種であり、水禽は確認できなかった。

3月には猛禽類であるサシバが1羽確認できた。

表4 ルート1（アパート～屋部川（宇茂佐郵便局））における鳥類の確認種リスト  
(2011年3月～9月)

No.	科名	種名	生息区分	生活形	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計
1	効	サシバ	旅鳥および冬鳥	陸禽	1	0	0	0	0	0	0	1
2	チドリ	ムナグロ	旅鳥または冬鳥	渉禽	0	1	0	0	0	0	0	1
3	ハト	キジハト	留鳥	陸禽	0	1	9	3	7	3	7	23
4	キツキ	コゲラ	留鳥	陸禽	0	0	0	1	0	0	0	1
5	ツバメ	ツバメ	旅鳥、一部越冬	陸禽	0	0	1	0	0	0	0	1
6		リュウキュウツバメ	留鳥	陸禽	0	0	0	0	0	1	7	1
7	セキレイ	マシロツメナガセキレイ	旅鳥または冬鳥	陸禽	0	2	0	0	0	0	0	2
8		キセキレイ	冬鳥	陸禽	0	2	0	0	0	0	0	2
9		ハクセキレイ	冬鳥	陸禽	1	0	0	0	0	0	0	1
10	ヒヨドリ	シロガシラ	留鳥	陸禽	23	27	16	5	7	3	41	81
11		ヒヨドリ	留鳥および冬鳥	陸禽	2	1	3	6	1	1	0	14
12	ツグミ	イソヒヨドリ	留鳥	陸禽	2	0	0	0	1	1	1	4
13	ウグイス	ウグイス	留鳥	陸禽	2	0	0	0	0	0	0	2
14		セッカ	留鳥	陸禽	0	0	1	3	7	15	5	26
15	ハチドリ	スズメ	留鳥	陸禽	23	24	58	39	125	157	175	426
16	カエデチョウ	シマキンハラ	留鳥(外来種)	陸禽	0	0	2	2	0	0	0	4
17	カラス	ハシブトガラス	留鳥	陸禽	27	37	22	20	18	12	36	136



ルート2では、21科44種の鳥類が確認できた。確認できた種のうち、留鳥が16種であり、渡り鳥は28種であった。また、確認できた種のうち、陸禽が23種、渉禽が16種であり、水禽は5種であった。

表5 ルート2（屋部川の志味橋～大瀬橋～名座喜橋）における鳥類の確認種リスト  
（2011年3月～9月）

No.	科名	種名	生息区分	生活形	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計
1	サキ	ゴイサキ	冬鳥または留鳥	渉禽	0	1	0	0	0	0	0	1
2		ササゴイ	冬鳥	渉禽	4	0	4	0	0	0	0	8
3		ダイサキ	冬鳥	渉禽	11	0	1	0	4	3	75	94
4		チュウサキ	冬鳥	渉禽	1	0	0	0	4	0	0	5
5		コサキ	冬鳥、一部留鳥	渉禽	12	7	8	2	6	5	11	51
6		クロサキ	留鳥	渉禽	0	0	1	2	1	1	1	6
7		アオサキ	冬鳥	渉禽	1	1	1	0	6	6	20	35
8	カモ	オナガカモ	冬鳥	水禽	4	0	0	0	0	0	0	4
9		ハリケン	留鳥(外来種)	水禽	8	3	12	0	2	8	19	52
10	幼	ミサゴ	冬鳥	陸禽	1	1	0	0	0	0	0	2
11		サシバ	旅鳥および冬鳥	陸禽	6	0	0	0	0	0	0	6
12	チドリ	コチドリ	冬鳥	渉禽	35	7	0	0	0	0	0	42
13		ムナグロ	旅鳥または冬鳥	渉禽	17	100	0	0	0	4	2	123
14	シキ	ハマシキ	冬鳥	渉禽	0	0	0	0	0	1	0	1
15		アカアシシキ	旅鳥または冬鳥	渉禽	0	3	0	0	0	0	0	3
16		アオアシシキ	旅鳥または冬鳥	渉禽	1	3	3	0	0	1	0	8
17		クサシキ	冬鳥	渉禽	12	1	0	0	0	0	0	13
18		幼ブシキ	冬鳥	渉禽	8	0	0	0	0	0	0	8
19		キアシシキ	旅鳥、一部越冬	渉禽	10	0	14	0	0	8	4	36
20		イソシキ	冬鳥	渉禽	31	46	20	0	3	23	90	213
21	カモメ	エリグロアシサシ	夏鳥	水禽	0	0	0	2	0	0	0	2
22	ハト	キジハト	留鳥	陸禽	5	4	7	2	5	8	26	57
23		スアカアハト	留鳥	陸禽	0	0	0	0	0	0	1	1
24	カワセミ	アカショウビン	夏鳥	水禽	0	0	0	1	0	1	0	2
25		カワセミ	留鳥	水禽	3	9	3	0	2	1	5	23
26	ツバメ	ツバメ	旅鳥、一部越冬	陸禽	13	2	8	0	0	0	0	23
27		リュウキュウツバメ	留鳥	陸禽	36	45	48	22	20	31	96	298
28	セキレイ	キセキレイ	冬鳥	陸禽	13	24	0	0	0	0	0	37
29		ハクセキレイ	冬鳥	陸禽	33	1	0	0	0	0	0	34
30	ヒヨドリ	シロガシラ	留鳥	陸禽	48	50	52	18	23	32	124	347
31		ヒヨドリ	留鳥および冬鳥	陸禽	14	8	13	3	7	17	19	81
32	レンジャク	ヒレンジャク	旅鳥	陸禽	1	0	0	0	0	0	0	1
33	ツグミ	イソヒヨドリ	留鳥	陸禽	10	3	5	4	1	9	16	48
34		ツグミ	冬鳥	陸禽	4	0	0	0	0	0	0	4
35	ウグイス	ウグイス	留鳥	陸禽	21	2	0	0	0	0	0	23
36		キマユムシクイ	冬鳥	陸禽	58	27	0	0	0	0	0	85
37		セッカ	留鳥	陸禽	0	3	6	19	32	29	36	125
38	シジュウカラ	シジュウカラ	留鳥	陸禽	1	0	0	0	0	0	0	1
39	メジロ	メジロ	留鳥	陸禽	14	7	8	2	6	4	3	44
40	ハトトリ	スズメ	留鳥	陸禽	62	62	42	38	105	32	67	408
41	アトリ	マヒワ	冬鳥	陸禽	1	7	0	0	0	0	0	8
42	カエデチヨウ	シマキンハラ	留鳥(外来種)	陸禽	0	0	4	3	1	0	0	8
43	ムクドリ	ムクドリ	冬鳥、一部留鳥	陸禽	4	0	0	0	0	0	0	4
44	カラス	ハシブトガラス	留鳥	陸禽	106	127	66	53	115	94	140	701



(2) 月別優占種の推移

ルート1における月別の優占種第1位～5位の推移を表6に示した。優占種は大部分が留鳥であった。また、優占種のすべてが陸禽であった。また、優占種の第1位～3位までは、ハシブトガラス、スズメ、シロガシラが占めていることが多かった。

表6 ルート1（アパート～郵便局）における鳥類の月別優占種第1位～5位の推移  
(2011年3～9月)

月	優占種第1位		優占種第2位		優占種第3位		優占種第4位		優占種第5位	
	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数
3月	ハシブトガラス	27	シロガシラ, スズメ	23	-	-	ヒヨドリ, イビロドリ, ウグイス	2	-	-
4月	ハシブトガラス	37	シロガシラ	27	スズメ	24	マシロツメ, ガセキレイ, キセキレイ	2	-	-
5月	スズメ	58	ハシブトガラス	22	シロガシラ	16	キジバト	9	ヒヨドリ	3
6月	スズメ	39	ハシブトガラス	20	ヒヨドリ	6	シロガシラ	5	キジバト	3
7月	スズメ	125	ハシブトガラス	18	キジバト, シロガシラ, セッカ	7	-	-	-	-
8月	スズメ	157	セッカ	15	ハシブトガラス	12	キジバト, シロガシラ	3	-	-
9月	スズメ	175	セッカ	41	ハシブトガラス	36	キジバト, シロガシラ	7	-	-

ルート2における月別の優占種第1位～5位の推移を表7に示した。優占種第1位は3月～9月まで全てハシブトガラスであった。3月～5月までは、キマユムシクイ、ムナグロ、イソシギなどの渡り鳥が優占種に含まれていたが、6月～8月までは、渡り鳥は優占種第1位～5位までに含まれていなかった。9月には優占種第4位（イソシギ）と優占種第5位（ダイサギ）に渡り鳥が含まれていた。

表7 ルート2（屋部川志味橋～名座喜橋）における鳥類の月別優占種第1位～5位の推移  
(2011年3～9月)

月	優占種第1位		優占種第2位		優占種第3位		優占種第4位		優占種第5位	
	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数	種名	個体数
3月	ハシブトガラス	106	スズメ	62	キマユムシクイ	58	シロガシラ	48	リュウキュウツハメ	36
4月	ハシブトガラス	127	ムナグロ	100	スズメ	62	シロガシラ	50	イソシギ	46
5月	ハシブトガラス	66	シロガシラ	52	リュウキュウツハメ	48	スズメ	42	イソシギ	20
6月	ハシブトガラス	53	スズメ	38	リュウキュウツハメ	22	セッカ	19	シロガシラ	18
7月	ハシブトガラス	115	スズメ	105	セッカ	32	シロガシラ	23	リュウキュウツハメ	20
8月	ハシブトガラス	94	シロガシラ, スズメ	32	-	-	リュウキュウツハメ	31	セッカ	29
9月	ハシブトガラス	140	シロガシラ	124	リュウキュウツハメ	96	イソシギ	90	ダイサギ	75

### (3) 生息区分別確認個体数の推移

鳥類の生息区分別確認個体数の推移を図2に示した。

ルート1では、大部分が留鳥であり、渡り鳥はほとんど確認できなかった。

ルート2では、留鳥は常に多く確認されており、3月～5月では冬鳥と旅鳥といった渡り鳥が多く確認されている。冬鳥は、6月には確認されていないが、3月～5月および7月～9月には確認されている。夏鳥は、5月～8月にわずかであるが確認されている。

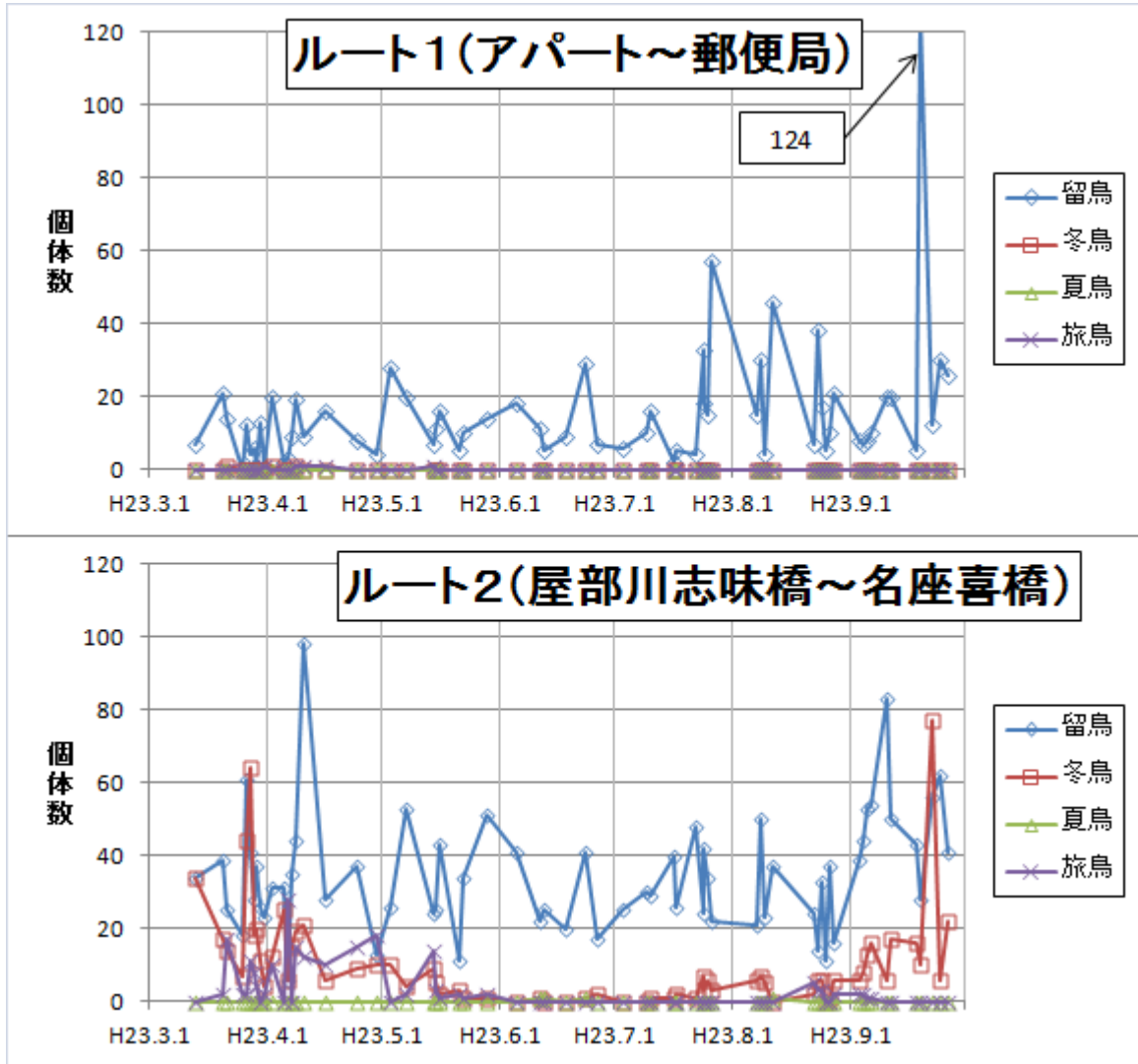


図2 鳥類の生息区分別確認個体数の推移 (2011年3月～9月)

(4) 水禽・渉禽・陸禽別確認個体数の推移

水禽・渉禽・陸禽別の確認個体数の推移を図3に示した。

ルート1では、大部分が陸禽であり、水禽および渉禽はほとんど確認されなかった。

ルート2では、陸禽は常に多く確認されている。渉禽は3月～5月に多く確認され、6月ではほとんど確認されず、7月下旬から9月にかけて再び確認されている。水禽は、個体数が少ないながらも、3月～9月まで確認されている。

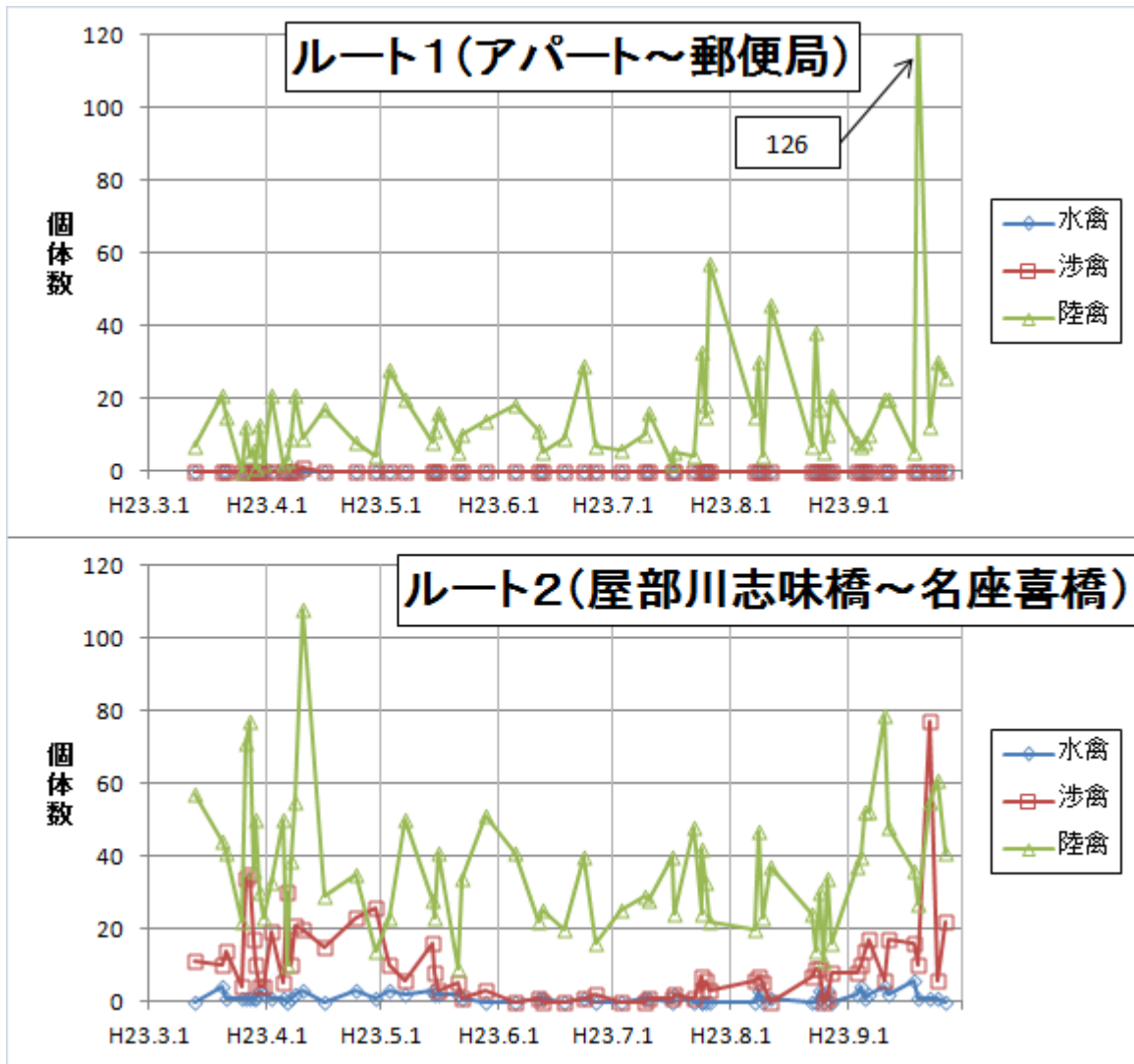


図3 鳥類の水禽・渉禽・陸禽別確認個体数の推移 (2011年3月～9月)

(5) 屋部川周辺で確認された希少な鳥類

屋部川周辺で確認された希少な鳥類を表8に示した。

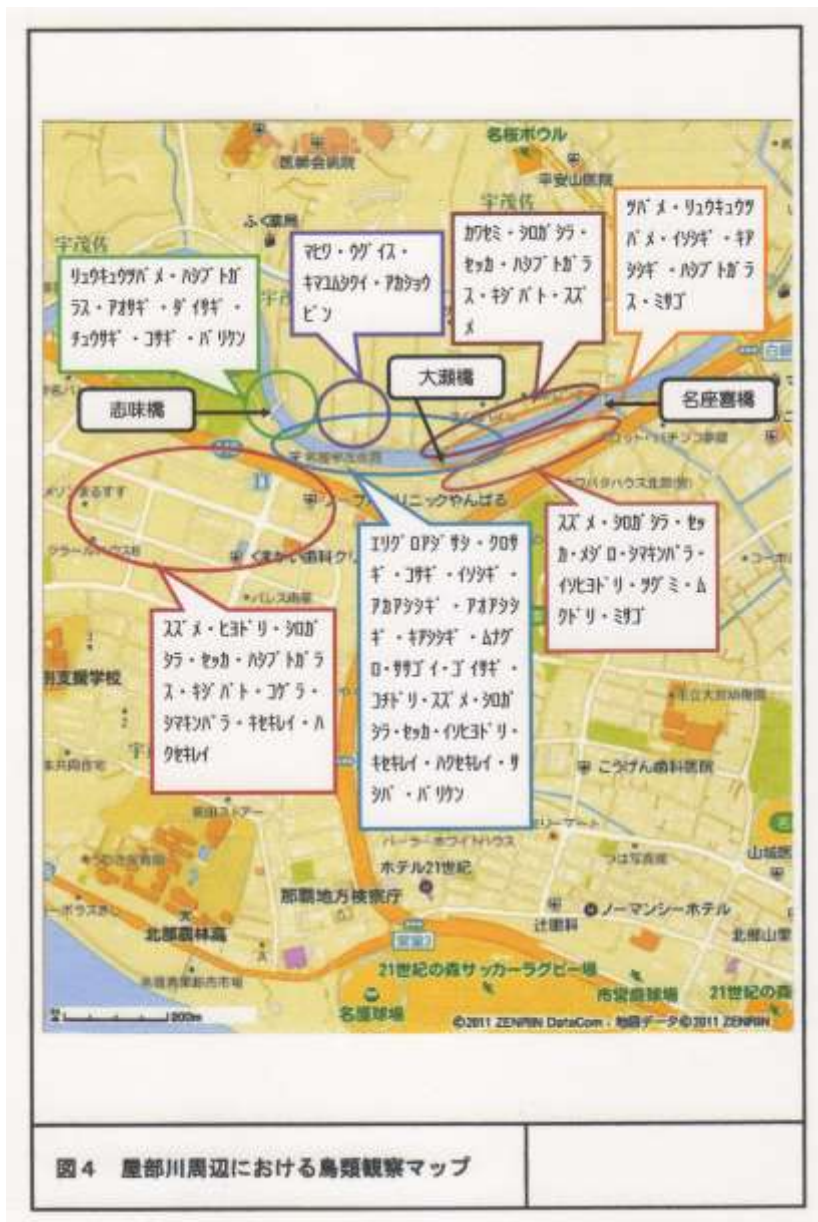
2011年3月～9月に、5目6科7種の希少な鳥類が確認された。

表8 屋部川周辺で確認された希少な鳥類

No.	目名	科名	種名	天然記念物の指定	環境省RDB	沖縄県RDB
1	ゴウトリ	サギ	チュウサギ		準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧(NT)
2	幼	幼	ミサゴ		準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
3	ホドリ	シギ	アカアシギ		絶滅危惧Ⅱ類(VU)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
4		カモ	エリゴロアシ			準絶滅危惧(NT)
5	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン			準絶滅危惧(NT)
6			カワセミ			準絶滅危惧(NT)
7	キツキ	キツキ	コケラ			準絶滅危惧(NT)

(6) 屋部川周辺における鳥類観察マップの作成

屋部川周辺における鳥類観察マップを図4に示した。



5. 考察

(1) 鳥類の確認種

ルート1では12科17種、ルート2では21科44種の鳥類が確認できたことから、ルート2の方がより多くの鳥類の生活の場となっていることが分かる。ルート1は、元々山地であったところを、開発により続々とアパートが建設され、植物が非常に少なく、自然度の乏しい環境となっている。このため、生息できる鳥類の種類が限られると考えられる。実際に、確認できた個体数の大部分がハシブトガラス、スズメ、シロガシラ、セッカなどに限定されていた。

これに対し、ルート2では、屋部川という水辺環境があるため、生息できる鳥類の種類数が多かったと考えられる。

(2) 月別優占種の推移

ルート1では、優占種は大部分が留鳥であり、優占種の第1位～3位までは、ハシブ

トガラス、スズメ、シロガシラが占めていることが多かったことから、環境が単純であることが推測される。また、渡り鳥が生活できる場があまりないと考えられる。

ルート2では、3月～9月まで優占種の第1位がすべてハシブトガラスであり、常にハシブトガラスが占有していることが伺える。以前は、沖縄においてハシブトガラスは山地に多かったという話をよく聞いていたが、沖縄島北部の名護市においても、ハシブトガラスが人間の生活の場である市街地に、生活の場を拡大してきている可能性が高いと考えられる。

それ以外に、ルート2では、3月～5月までは、キマユムシクイ、ムナグロ、イソシギ、ダイサギなどの渡り鳥が優占種に含まれていたことから、渡り鳥が飛来して生活できる環境が残っていると考えられる。

### (3) 生息区分別確認個体数の推移

ルート1では、大部分が留鳥であったが、ルート2では留鳥が常に多く確認されているものの、3月～5月と7月～9月では冬鳥と旅鳥といった渡り鳥が確認され、5月～8月には夏鳥がわずかであるが確認されている。

このことから、ルート2では、渡り鳥が渡来しやすい環境であると考えられる。ルート2では、屋部川は干潮時に干潟が現れ、それを餌場とする渡り鳥が多数訪れたと考えられる。屋部川の干潟は、渡り鳥たちの餌場として機能していると考えられる。

### (4) 水禽・渉禽・陸禽別確認個体数の推移

ルート1では、大部分が陸禽であり、水禽および渉禽はほとんど確認されなかったが、これは河川や池などの水辺環境が存在しないためであると考えられる。

これに対し、ルート2では、陸禽が常に多く確認されているが、季節に応じて渉禽や水禽が確認されている。これは、ルート2が河川周辺の環境であることが影響していると考えられる。また、渉禽や水禽は渡り鳥が多いため、渡来する季節に確認個体数が多くなったと考えられる。今後、秋季が訪れる10月以降には、さらに多くの渉禽や水禽が渡来する可能性がある。今回確認された水禽の中には、カモ類が非常に少なかった。調査範囲である屋部川の志味橋～名座喜橋では、潮汐の影響を受けるため、多くのカモ類が塩分のある環境を好まないことに関係していると考えられる。

### (5) 屋部川の探鳥地としての可能性

2011年3月～9月に、ルート2（屋部川志味橋～名座喜橋）では、21科44種の鳥類が確認できた。留鳥だけではなく、多くの渡り鳥も確認できた。今後、秋を迎える10月以降に調査を継続することにより、さらに多くの渡り鳥が渡来する可能性もある。さらに、水禽、渉禽、陸禽がそれぞれ確認できており、さまざまな鳥類を観察することができる場となっている。

また、屋部川の河口域では、干潮時に広大な干潟が広がっている。この河口干潟は、今回は調査を実施できなかったが、秋季以降に渡り鳥が渡来する可能性がある。屋部川の河口域は、屋部中学校や屋部小学校の近くに位置するため、理科や総合学習、あるいは放課後の野鳥観察の場として十分利用できる。

図4に示した屋部川における鳥類観察マップを作成したことにより、屋部川の鳥類が観察しやすくなり、一般の方々に屋部川を鳥類観察の場として利用していただけたと考えられる。

これらのことから、屋部川は探鳥地として利用可能であり、学校現場や地域住民の環境学習の場として利用価値があると考えられる。

## 6. 今後の課題

今後の課題として、まず調査を一定の目処がつくまで継続させたい。

また、屋部川については、昨年、水質と水生生物の調査を行い、今回は、鳥類の調査を行ったので、ぜひ今度は、屋部川周辺に生息している昆虫の調査を確実に行いたい。今回は忙しかったので、河口までの調査ができなかった。今後は、河口の調査を行い、そして、屋部川のスペシャリストになれるように努力していきたい。

## 7. 感想

僕は、初めは鳥の名前が分からず、父さんと二人で図鑑を確認しながら調査を行ってきた。調査を進めるにつれ鳥の名前や特徴、鳴き声で特定できるようになってうれしかった。

一番大変だったのは、データ入力だった。最初は調査票一枚入力するのに一時間以上かかってしまった。でも、入力作業も繰り返し続けることで、だいぶ上達した。

あと、サシバやミサゴなど猛禽類を見れた日や、珍しい鳥を見られた日もうれしかった。

これから秋になるにつれて鳥の数もまた増えると思うので、これからも調査を続けていきたい。

## 8. 謝辞

父や母には調査に同行していただき、調査を手伝っていただいた。妹や弟も時々ついてきてくれた。祖父からはフィールドスコープをいただいた。家族に感謝する。

本研究にあたり、琉球新報社主催、(財)海洋博覧会記念公園管理財団共済、琉球新報創刊120周年イベント「新報サイエンスクラブ」の助成金を頂いた。関係各位に深く感謝する。

## 9. 参考文献（著者名 50音順）

五百沢日丸、2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.

沖縄県立博物館監修、1999. 沖縄県の探鳥地ガイド. 東洋企画印刷.

沖縄野鳥研究会、2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版.

叶内拓哉、2005. ポケット図鑑 日本の鳥 300. 文一総合出版.

桐原政志、2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.

細川博昭、2010. 身近な鳥のふしぎ. ソフトバンク クリエイティブ株式会社.

西平守孝、1974. 沖縄の潮間帯現状調査報告（案） 沖縄の潮間帯—1974. 琉大海洋保全研究会.

村上 悟、2001. 水鳥を通じて見る琵琶湖流域. 淀川水系流域委員会琵琶湖部会.